

「ラストピース」

第4話

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（18）大学1年生

高橋湊（19）（22）理菜のアパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

西原圭吾（18）市川の友達

成宮翔（18）市川の友達

鈴木健一（41）理菜の育ての父

鈴木香澄（41）理菜の育ての母

白水透（51）（54）バーのマスター。

佐々木俊哉（41）（45）ニュースサイトの

編集長

塚目凜子（31）（34）護身術の師範

教授

○三田大学・キャンパス内

理菜と親友・花村夏凜（18）の前から市川拓也（18）が歩いてくる。

夏凜「拓也く」

と、手を振る。

市川、手を挙げて理菜たちに近づいてくる。

理菜、緊張した顔。

理菜「（ぎこちなく）や、やつほー」

市川「∴∴おう」

夏凜「西原たちは？　一緒じゃないの？」

市川「女子みたいにいつも一緒ってわけじゃないから」

夏凜「（ニヤニヤしながら）拓也ハブられてんじゃない？」

市川「違うわ」

理菜、市川の様子を観察するようにじっと見つめる。

市川、理菜の視線に気づく。

理菜、パッと目を逸らす。

市川「……じゃあな」

理菜「う、うん……」

夏凜「バイバイ」

理菜、市川の背中を見つめる。

夏凜、そんな理菜を怪しむ。

○カフェ・店内

理菜と夏凜、向かい合ってパフェを食べ
べている。

夏凜「それで？ 拓也と何かあったの？」

理菜、むせ込みながら水に手を伸ばす。²

夏凜「あ、誤嚥した時は水飲まない方がいい
んだよ」

理菜、水に伸ばした手を止め、必死に
咳を止める。

夏凜「喧嘩じゃないことは分かるんだけどさ。

いつもと違うよね。なんかぎこちないとい

うか」

理菜「……」

夏凜「ほら、全部白状しなさい」

理菜「……実は。来月の花火大会、2人で行くって言われて……」

夏凜、むせ込んで水を流し込む。

理菜「あ！ 水はダメだって夏凜が言ったのに！」

夏凜、胸を叩いて咳を堪える。

理菜「（言い聞かせるように）多分だけど、相談したいことがあるんだよね！ だからあえて2人でってことなんだと思う！」

夏凜、理菜をじっと見つめて、

夏凜「（諭すように）理菜は誰かに悩みを相談したい時、花火大会に誘うわけ？」

理菜「（目が泳ぐ）それは……」

夏凜「（優しく）薄々気づいてるんじゃない？ 拓也がどういうつもりなのか」

理菜「でも……だって……拓也が私を……そんなこと絶対ないもん。ただの勘違いだ……」

夏凜M「やっと自覚したか」

と、にこやかに見守る。

○同・食堂

夏凜、市川、同級生・西原圭吾（1

8）、成宮翔（18）が席に座って会話。

夏凜「聞いたよ。花火大会に理菜のこと誘ったんだってね」

成宮「そうなの？」

市川「……もう聞いたのかよ」

夏凜「（楽しそうに）拓也に何か悩みがあるんじゃないかって、理菜心配してたよ」

成宮「え、理菜ちゃんって天然？　さすがに鈍感すぎない？」

夏凜、何か言いたげな顔で口を閉じる。

西原「鈴木は昔からそうなんだよ」

市川「（苦笑して）やっぱなー。どうせ勘違いしてると思ったわ」

西原「でも拓也にしては頑張った方じゃん」

市川「俺にしては』は余計だよ」

成宮「いいなあ。拓也だけズル！　（夏凜に向かって）ねえ、俺らも行こうよ花火大

会！」

夏凜「そうだね！　（西原に向かって）みんなで行こ！」

西原「あ、ああ……」

○バー・店内（夜）

客で賑わう店内。

カウンターには師範・塚目凜子（3

4）が座り、理菜と高橋湊（22）も

カウンターで作業をしている。

マスター・白水透（54）は花火大会

のチラシを壁に貼っている。

凜子、チラシを見ながら、

凜子「花火大会か。華の大学生ズは行かな

いの？」

高橋「（怠そうに）花火見にわざわざあんな

人混みに行く意味が分からない」

凜子「またそんなこと言ってコイツは！」

と、殴るポーズ。

白水「湊、ゴミ出すの手伝ってくれるか？」

高橋「はい」

理菜「私行きますよ！」

白水「重いから大丈夫だよ。凜子の相手して

あげてて」

凜子「ちよつとマスター私の扱いひどくな

い？」

理菜、苦笑い。

凜子「で、理菜ちゃんは行かないの？ 花火

大会」

理菜「……中学からの同級生と行く予定です」

凜子「（ノリノリで）それって男の子？」

理菜「……（恥ずかしそうに）はい」

凜子「くううく青春だねえ。いいなあ」

理菜「……凜子さんは行かないんですか？」

凜子「私だって相手がいれば行きたいけどさ

く」

理菜「湊くん……さっきはああ言っていました

けど、凜子さんとなら行きたいと思います」

凜子「湊と私が…… 2人で花火大会…… アッ

ハハハ！ ウケる」

と、腹を抱えて笑う。

理菜、状況が飲み込めていない。

師匠「あく笑いすぎてお腹痛っ。理菜ちゃん
もしかして何か勘違いしてるな？ 湊が私
のこと好きとか思ってるんでしょ」

理菜「……そうなのかなって……」

凜子「ないないない。真夏に雪が降るくらい
ありえない！ だって10以上離れてるん
だよ？ 私たちはそういうんじゃないから。
だから安心して（ウインク）」

理菜「（慌てて）すみません！ 勝手に勘違
いして……」

理菜、ホッとした顔。

凜子、微笑む。

凜子「理菜ちゃん。湊と一緒にいてくれてあ
りがとうね」

理菜「え？」

凜子「アイツ、理菜ちゃんたちより年は上だ
けど、それでもまだ22で十分若いのに、
たまに口うるさい父親みたいなことあるで

しよ？」

理菜「（笑って）確かに」

凜子「学校行事参加したり、部活したり、放課後友達と遊んだり。そういう普通の学生生活が送れなかったんだよね」

理菜「そうなんですか……」

凜子「周りにいたのは、私たちみたいな大人ばかりだったからか、妙にませちゃって。アイツが子供らしくいられた時間は短かったと思う。私たちの責任なんだけどね」

理菜「……そうでもないと思います」

凜子「？」

理菜「私、最初すごくビックリしたんです。マスターとか佐々木さんとか凜子さんと話す湊くんは、私たちが普段大学で見ている彼とはまた違って。いつも見ている湊くんは、年上のしっかりしたお兄さんって感じなんですけど、ここでの湊くんはちょっと子供っぽいというか。それってきつと、みなさんといると、背伸びせずありのままの

自分でいられるってことだと思っはんです」

凜子、目を丸くする。

理菜「ごめんなさい。なんか知ったようなこと
と言っちゃって……」

凜子、首を横に振る。

凜子「ありがとう。私たちは、今湊が理菜ち
やんたち同世代の子と一緒にいるのがすご
く嬉しい。理菜ちゃん。これからも、湊の
ことよろしくね」

理菜「はい！」

凜子「あ、私が話したことは内緒にしてね」
と、小指差し出す。

理菜「はい」

と、小指を絡める。
白水と高橋が戻ってくる。

白水「2人で何話してたんだ？」

凜子「内緒。女同士の秘密だもんね？」

理菜「ねー？」

高橋「変な約束とかさせられてない？」

凜子「ちよっと湊、それどういう意味よ！」

高橋「そのままの意味ですよ」

理菜、高橋たちのやりとりを微笑ましく見守る。

○大通り・車道（深夜）

車通りのほとんどない道路を走る高橋のバイク。

後ろには高橋の腹に手を回した理菜が乗っている。

理菜、高橋の背中を見ながら、

理菜M「湊くんは自分のことをほとんど話さない。最初は性格的なものかと思っていたけど、きっと理由はそれだけじゃなかったんだ」

赤信号でバイクが止まり、高橋が理菜の方を向く。

目が合う2人。

高橋「？」

理菜「あ、いや……（誤魔化すように）湊くん夏休みの予定は？ 出かけたとか！」

高橋「特に何も。バイトくらい」

理菜「そっか、バイトか！ えらいなあちゃん
んと稼いで。私も頑張らないと！」

高橋「理菜は？ 夏休みの予定」

理菜「私も実家に帰ったりするくらいかな。

と言っても、電車ですぐの距離なんだけど」

高橋「そっか」

理菜「湊くんも帰省とかしな」

「湊くんも帰省とかしないの？」と、

理菜が言いかけると、信号が青になっ
てバイクが動き出し、理菜の声がかき
消される。

走りながら、

高橋「（声を張って）ごめん。なんか言っ
た？」

理菜「（声を張って）ううん。なんでもな
い！」

理菜 M「湊くんに一体何があったのか、気に
ならないと言えば嘘になるけど。例えど
んな過去があろうと関係ない。もし湊くんが

話したくなったら聞けばいいんだと、この時の私はそう思っていた」

○三田大学・講義室内

教授の話聞く生徒たち。

スクリーンには試験の日時が記載されている。「9月24日」と。

教授「この授業は夏休み明けに試験をする。

休み期間中もちゃんと勉強しておくように。

以上」

と、教室を出ていく。

生徒がざわめく。

夏凜「休み明けに試験とか性格ワルー！」

理菜、自分のパソコンに表示されている試験の日時を見つめる。

夏凜「どうかした？」

理菜「ううん！」

と、荷物をまとめる。

高橋 M 「9月24日か……」

と、隣で身支度を整える理菜を見る。

夏凜「湊くんも帰ろ！」

高橋「あ、うん」

高橋、自分も荷物をまとめて立ち上がる。

○同・キャンパス内（夕方）

太陽が沈みかけ、空がオレンジ色に染まる。

理菜たちが歩きながら、

夏凜「太陽沈んでんのにこの暑さは異常だよ」と、手で仰ぐ。

理菜「梅雨明けて一気に暑くなったよね」

夏凜「ね。無事前期の授業全部終わったこと

だし、ご飯食べて帰らない？」

理菜「賛成！（高橋に向かって）湊くんも！」

高橋「いいよ俺は」

理菜「まあまあそう言わず。今日バイト入ってないでしょ？（ニコニコ）」

高橋、はあっと息を吐いて、

高橋「分かった」

と、理菜たちについていく。

○鈴木家・正面

電柱に止まっているセミが青空に向かって鳴いている。

○同・理菜の部屋の中

理菜、全身鏡の前に立ち、母・鈴木香澄（41）に浴衣を着せてもらっている。

髪は和装に合うように簪で結われていて、目元のメイクはいつもよりラメで華やか。

理菜「2人で行こうって、やっぱりそういうことなのかな？ 私の自意識過剰じゃない？」

香澄「市川くんも理菜ももう子供じゃないんだし？ そうやって誘ったってことは、理菜に恋愛感情があってもおかしくないかも

ね（微笑む）」

香澄、帯を結び終わって理菜の肩に手を置く。

理菜、嬉し恥ずかしそうな顔で鏡を見つめる。

○同・玄関（夕方）

理菜、下駄を履く。

鈴木「ああ可愛いなあ。モデルだよモデル！」

と、理菜を連写する父・鈴木健一（41）。

理菜、モデルのようにポーズを決める。

鈴木「（ハイテンションで）いいぞいいぞ」

と、撮り続ける。

香澄「人多いだろうから気をつけてね」

理菜「うん。行ってきます」

鈴木「楽しんでくるんだぞ」

と、上機嫌で手を振って見送る。

香澄「市川くんによろしく伝えてね」

理菜「はぁーい」

ドアが閉まり、鈴木が固まる。

鈴木「ん？ 今市川くんって言った？」

香澄「やっぱり私の思った通り、来たわねモ

テ期」

鈴木「え？ 今日って女の子と行くんだよね

に そうだよねに」

香澄「市川くんのごことは中学から知ってるから応援したいけど、でも湊くんって子も気になるう。ああなんつてもどかしいの

う！」

と、部屋に戻っていく。

鈴木「ちよつと香澄！ 俺の質問に答えて！

まさか今日のお祭りって市川くんに行くの

かに」

と、香澄の後を追う。

○ 駅・ロータリー（夕方）

浴衣を着た人たちが待ち合わせをしている。

市川、スマホを見たり周囲を見たり落

ち着かない様子。

理菜「拓也お待たせ」

市川が顔を上げると目の前に理菜の姿。

市川「俺もさつき来たところ……」

市川、目を奪われる。

理菜「（口を尖らせて）浴衣なんて着て、浮

かれすぎだつて言いたいんでしょ」

市川「いや……まさか浴衣で来てくれるとは

思わなかったから。浮かれてんのは俺の方

かも」

理菜、ドキツとした顔。

理菜「（嬉し恥ずかしそうに）そう？……」

市川「（照れくさそうに）行くか」

理菜「（いつもの調子で）私焼きそば食べた

い！ あとリング飴と、チョコバナナとね」

と、指折り数える。

市川「（理菜に続くように）たこ焼きとかき

氷、だろ」

と、理菜に続く。

理菜「すごい！ なんて分かったの……」

市川「何年一緒にいると思っただよ」

理菜「さっすが」

理菜と市川、人々の流れる方へ歩いて行く。

○川沿い・道（夜）

道の両側に屋台が並び、祭り客で賑わう。

理菜と市川、ビニール袋を提げて歩く。前から大柄の男がフラフラしながら歩いてきて理菜にぶつかる。

市川、大きくよろけた理菜の肩を抱きしめるように受け止める。

市川「あつぶね。アイツ絶対酔ってんな」と、男の後ろ姿を睨む。

理菜、市川の腕の中で目をパチパチさせる。

市川「大丈夫か？」

理菜、目を泳がせながら、

理菜「うん。ありがと」

市川、理菜を離す。

歩き出す2人。

市川、理菜の手を握ろうとしてやめる。

○同・土手（夜）

レジャーシートを敷いて花火の場所取りをしている人たち。

理菜「よいしょ」

と、地面に敷いたシートに座る。

市川「あくすごい人だったな」

と、理菜の隣で仰向けになる。

理菜「ほんとほんと」

ビニール袋の中からやきそばとたこ焼きを取り出す。

理菜「はい。拓也も」

拓也「サンキュ」

拓也、竹串でたこ焼きを刺して食べる。

理菜「そういえばさ、前拓也のバイト先に湊くん来たんでしょ？ 2人でどんな話したの？」

市川「（面倒そうに）そんなんもう忘れた」
理菜「ええー何それー。みんなで仲良くしよ
うよ。ね？」

市川、胡座をかき、頬杖をつく。

市川「……まあ悪いやつではないのは分かつたけど……」

理菜「（目を丸くして）え！」

市川「（慌てて）でもまだ信用したわけじゃねーから！」

理菜「そっかそっか。良かったあ」

と、ニコニコ笑う。

市川「（不服そうに）理菜は随分アイツの肩持つよな。（ふぎけて）好きなんだろ？」

理菜「（必死に）違うから！ そんなわけないじゃん！ もう何言ってるの拓也く」

理菜、平静を装うが動揺して頬も少し赤い。

市川、「やっぱりな」という顔で空を見上げる。

理菜、コホンと咳払いする。

理菜「……ねえ拓也」

市川「（空を見たまま）ん？」

理菜「いつも心配してくれてありがとうね」

市川「（理菜を見て）急にどうした」

理菜「いやあ、なんか改めて言ったことなかったなって。拓也と、それから夏凜。2人がそばにいてくれたから、今の私があるの。拓也たちは、たこ焼きのたこみたいなの。私にとって、なくてはならない存在だから！」

市川、フツと笑って

市川「例えのチョイスおかしいだろ」

理菜「それくらい大切だってこと！（得意げに）分かりやすいでしょ？」

と、笑う。

市川「それは俺も夏凜も同じ。俺らがたこなら、理菜は衣だな。ただけじゃたこ焼きにならない。たこ焼きは衣あってこそだから」

理菜「えー衣かあ」

市川「理菜が言い出しんだろ」

理菜「やっぱ逆にしよっかな」

と、はにかむ。

市川「でも1つ知っというてほしいんだけど」

理菜「ん？」

市川「俺が理菜のそばにいるのも、色々うるさく言うのも、それからこうやって祭りに誘うのも全部。(真剣に)理菜のことが好きだからやってる」

理菜、目を見開く。

打ち上げ花火が夜空にドーンと打ち上がり、観衆がわく。

しかし理菜と市川は見ていない。

市川「ずっと理菜のこと、好きだったから」

理菜、ドキドキした顔。

市川は何事もなかったかのように空を見上げて花火にはしゃぐ。

市川「おー！でかっ！ほら、理菜も見ろっ

て」

理菜「えっ……」

と、花火を見上げるがすぐに市川の横

顔をチラッと見る。

市川は花火に夢中。

理菜M「正直私は拓也の言ったことが気にな
って、花火どころではなかった」

○アパート・正面（夜）

理菜と市川が歩いて帰ってくる。

会話はなく、やりとりがぎこちない。

市川「今日はありがとう！」

理菜「私もありがとう。すごい楽しかった……
じゃあ」

と、階段を上る。

市川「花火の時のことだけど」

と、下から声をかける。

理菜、固まる。

市川「別に返事とかいいから！ 理菜が話し
てくれたように、俺も自分の気持ち伝えた
かっただけ。困らせるの分かってたけど……
：困らせてでも、伝えたかった。ごめん、
わがままで」

理菜、首を横に振る。

理菜「拓也……」

市川、口角を上げて、

市川「これからも、そばにいさせてもらおうし、
何があっても理菜の味方だから。だって俺
ら、〃たこ焼き〃だろ？」

理菜、柔らかく笑う。

理菜「うん。永久不滅の〃たこ焼き〃」

市川、晴れ晴れとした顔で来た道を戻
って行く。

理菜「拓也……ありがとう」
と、眩く。

○同・理菜の部屋の中（朝）

理菜、ベッドで眠っている。

カーテンの外は明るい。

全く起きる気配はない。

○同・理菜の部屋の中（夕方）

理菜、ベッドで眠っている。

カーテンは夕陽でオレンジ色に染まっ
ている。

枕元のスマホに着信。

理菜、眠そうに画面を確認すると、

「夏凜」から。

起き上がってスマホを耳に当てる。

理菜「（寝起きの声）もしもし」

夏凜の声「ごめん昼寝してた？」

理菜「んーん。夜からずっと寝ちゃって、

今起きた」

夏凜の声「えっと……一応聞くけど、今一人

だよな？」

理菜「（不思議そうに）うん？ もちろん」

夏凜の声「（ホツとして）だよな。それで、

昨日どうだった？ 拓也とお祭り行ったん

でしょ？」

理菜「……拓也にね、好きって言われた」

夏凜の声「（興味津々に）えっ、それで？」

理菜「でも返事は気にしなくていいからって
言われて。それで、これからもずっとたこ

焼きだねって」

○花村家・夏凜の部屋（夕方）

夏凜、机の上に鏡を置き浴衣姿でメイクをしている。

スピーカーにして通話中。

夏凜「た、たこ焼き？　理菜寝ぼけてるでしょ」

理菜の声「起きてますうー。拓也と夏凜がたこでね、私が衣なの」

夏凜、「何言ってるんだ？」という顔。

夏凜「まあいいや……やっぱ理菜はさ、湊くんが好き？」

理菜の声「分かんない……でも湊くんが笑ってる私まで嬉しくて、何が好きなんだろうとか、もっと色々知りたいって思うんだよね」

夏凜M「それはもう……そういうことだね」
理菜の声「ごめん私の話ばかり。そろそろ行くよね？」

夏凜、時間を確認。

夏凜「ほんとだもうこんな時間」

理菜の声「楽しんで来てね、ニッシーと」

夏凜「成宮くんも一緒だから。またね」

と、切電。

壁にかけられたコルクボードには写真やプリクラが貼られている。

制服の胸にコサージュをつけた理菜、

夏凜、市川の写真に向かって、

夏凜「やるじゃん拓也。カッコいいぞ」

と、眩く。

○川沿い・道（夜）

道の両側に屋台が並び、祭り客で賑わう。

屋台を見ながらはしゃぐ夏凜と成宮、

その後ろに西宮。

成宮「俺フランクフルト食べたい！」

夏凜「私も！」

成宮「圭吾は？」

西原「じゃあ俺も」

成宮「俺買ってくから、2人は先行ってて」

夏凜「ありがと〜！」

西原「よろしく」

成宮、屋台の列に並ぶ。

夏凜「（緊張して）行こっか」

西原「うん」

○同・土手（夜）

シートの上に座る夏凜と西原。

そわそわして落ち着かない夏凜。

夏凜「西原も浴衣着てくれば良かったのに〜」

西原「なんでだよ」

夏凜「なんか私だけ気合い入ってるみたいで

恥ずかしい」

と、口を尖らせる。

西原「いいじゃん。花村って和装も似合うん

だな」

夏凜、顔を真っ赤にして固まる。

西原、不思議そうな顔。

その瞬間花火が打ち上がる。

西原「おー始まったー」

と、呑気に空を見上げる。

土手の上から夏凜たちを見つけた成宮。

フランクフルトを3本持っている。

成宮「なんだよ。あの2人いい感じじゃん」

と、夏凜たちの元へ行く。

成宮「お待たせー」

西原「サンキューー」

西原、フランクフルトを受け取る。

成宮「はい」

と、夏凜に渡しながら夏凜の隣に座る。

夏凜「ありがとう！」

成宮「顔赤いけど、なんかいいことあった？

（口角を上げる）

夏凜「（必死に）気のせいだよ！！」

と、空を見上げる。

成宮、ニヤけながら花火を見る。

○アパート・理菜の部屋の中（夜）

理菜、テレビを見ている。
外から花火の音が聞こえてくる。
理菜、カーテンを開けるが、窓からは
花火が見えない。玄関の方へ行く。

○同・共用廊下（夜）

理菜がドアを開けて外に出ると、高橋
が柵に寄りかかって花火を見ている。

理菜「湊くん！」

と、高橋の隣に並ぶ。

理菜「湊くん、花火興味ないのかと思った」

高橋「人混みが嫌なだけ。花火は好きだよ」

理菜「（嬉しそうに）そっか」

理菜、「キレイ」と言いながらスマホ
で写真を撮る。

高橋「昨日見に行ったんじゃないかった？」

理菜「そうなんだけど、昨日はあんまりちゃ
んと見れなくて（苦笑）」

高橋「ふーん」

理菜「（呟くように）なんか諏訪湖の花火思

い出すなあ」

高橋「（つられるように）ああ、確かに」

理菜「え？」

高橋「え？ あ……」

理菜「湊くん、諏訪湖の花火見たことあるの？」

高橋「（目が泳ぐ）……うん。長野住んでたことあって……」

理菜「（嬉しそうに）そうなんだ！ 私古諏訪出身なの！ 湊くんは？」

高橋「（気まずそうに）北諏訪……」

理菜「隣だね！ もしかしたらどこかで会ってるかも」

高橋「……（顔が曇る）どうだろう」

理菜、不思議そうに高橋を見る。

○雑居ビル・前

ビルの隙間から花火が打ち上がっている。

ビルの前にはグラスを持って花火を眺

めている人たち。

白水と佐々木もいる。

白水「綺麗だなあ」

と、呟く。

○（白水の回想）バー・店の外（深夜）

T「3年前」

扉には「closed」の看板が下がっている。

○（回想）同・店内（深夜）

店内には白水透（51）だけ。

メガネをかけてカウンターで新聞を読んでいる。

一面には広尾台の事件。

扉が開いて高橋（19）が入ってくる。

白水「すみません。今日はもう閉めてて」

高橋「あの…白水先生ですよね？」

白水「…先生はやめてくれ。どちら様かな」

高橋、カウンターの前にくる。

高橋「竹内湊です。今は高橋だけど。竹内魁の弟の」

白水、大きく目を見開く。

白水「湊くんか……」

高橋「長野の事務所行ったらもう変わってて、先生が東京でバーやってるって聞いて来ました」

白水「……そうか。大きくなったね。今何歳だ？」

高橋、カウンターの上の新聞を見ながら、

高橋「19です」

新聞の一面には「広尾台一家4人殺害」の見出し。

白水「そうか」

と、記事を隠すように新聞を折りたたむ。

高橋、新聞を指差して、

高橋「6年前と同じですよね」

白水「……」

白水、カウンターに入り高橋に水を出す。

高橋、軽く頭を下げて座る。

高橋「6年前の事件のこと、先生から聞きたくてきました。できれば資料とかも見せてほしいです」

白水「だから先生はやめてくれ。俺はもうただのマスターなんだ」

高橋、新聞にバンと手を置いて、

高橋「コイツ絶対に次もやりますよ。また犠牲者が出る」

白水「悪いが帰ってくれ。もう関わりたくないんだ」

と、裏に入る。

○（白水の回想）同・バックヤード（深夜）

椅子とテーブルが置いてある小さな休憩スペース。

店の扉が開いて人が出ていく音がする。

白水「はあ」

テーブルの上には古諏訪町夫婦殺害事件の資料が広げられている。

○（白水の回想）同・店内（日替わり・夜）

カウンターには編集長・佐々木俊哉

（41）と師範・塚目凜子（31）。

テーブル席には客がまばらにいる。

扉が開いて高橋が店に入ってくる。

白水「いらっしや：：」

白水、高橋を見て言葉を止める。

高橋「こんばんは」

と、カウンターまでくる。

白水「：：（目を合わせず）何度来ても話
しないぞ」

高橋「バーボンのロックください」

と、カウンターの端の席に座る。

白水「これ飲んでさっさと帰れ未成年」

と、ストロー付きのオレンジジュース
のグラスを出す。

高橋、不満げにオレンジジュースを吸

う。

○（白水の回想）同・店内（深夜）

店内には白水と佐々木と凜子だけ。

他の客はいない。

凜子「（空いた席を見ながら）さっきの子が

例の……？」

白水「ああ……」

佐々木「兄貴のために奔走してるわけか。切

ないっすねえ」

凜子「マスター力になってあげないんです

か？」

白水「アイツの兄貴が前に言ってたんだよ。弟には自分のことなんて忘れて、自分と関わらない人生を生きてほしいって。その気持ちもよく分かるんだ。冤罪を晴らすって。いうのは、果てしない戦いだからな。そんな役目を担うのは、俺だけでいい。大人の俺だけで」

佐々木「俺も手伝いますよ。うちみたいな弱

小会社じゃ役に立てることは限られてるけど。特集記事組んだりもできますし。お偉い裁判官様が出した判決をひっくり返そうだなんて、想像しただけでワクワクする」
凜子「私も！ 体張ることがあれば任せてください！」

凜子、空手の形をやってみせる。

白水「ありがとう2人とも」

○（白水の回想）同・店内（日替わり・夜）

客がまばらに入っている店内。

カウンターには佐々木と凜子。

扉が開き高橋（20）が入ってきてカ

ウンターに座る。

白水「いい加減にしてくれ」

高橋「バーボンロックください」

白水「だから、お前未成年だろ」

高橋「この前20になりました」

白水、信じていない目。

高橋、免許証を見せる。

白水、ため息をついてドリンクを準備する。

× × ×

白水「ありがとうございますございました」

と、客を見送り、扉を閉める。

店内にいるのは高橋だけ。

白水がカウンターに戻る。

高橋「同じのお願いします」

と、空になったグラスをカウンターに置く。

顔色は全く変わっていない。

白水、無言でドリンクを作り始める。

高橋、ポツリと話し始める。

高橋「確かに、魁は地元で有名な不良だった。

夜遅くまで遊び回ったり、コンビニの前で

たむろして、タバコ吸ったり酒飲んだり。

お巡りさんにもよく世話なっていました。

でも誰かを殴ったり、金巻き上げたりとか

そういうのはなくて。ほんと、ただの田舎

のヤンキーですよ。ほら、どんないい子で

も、大学入ったら20になる前でも酒飲んでたりするじゃないですか。それと一緒にですよー

○（白水の回想）同・トイレ前（夜）

凜子、女子トイレから出てくると廊下に佐々木が立っている。

凜子「どうしたの？」

佐々木「しーっ」

と、口に人差し指を当てて、席の方を指差す。

高橋と白水の会話が聞こえる。

○（白水の回想）同・店内（夜）

白水、無言で新しいドリンクを出す。

高橋「高校卒業して、隣町の小さな自動車整備会社で働くようになってから、魁は今までが嘘みたいで真面目に仕事してた。住み込みだったけど、母さんがいない日はわざわざぎうちまで来て俺の飯作ってくれてまし

た。いいつつつてんのに、『俺と一緒に食
いたいんだよ』とかカッコつけて。あの時
の俺は思春期で、そういうのウザがってた
けど、本当は嬉しかった。あーでも、職場
の事務の子と付き合うことになった時はう
るさかったなく。もう結婚とか子供の話し
て。付き合ったばっかですよ？　ほんと単
純だなーと思いながら、でもあの頃の魁は
最高に幸せそうだった」

白水「（制止するように）もういいから湊く
ん」

高橋「そんな男が、見ず知らずの人の家に押
しかけて、衝動的にあんなむごいことをす
ると、ほんとに思いますか？」

白水「……」

高橋「この6年間、ずっと自分に言い聞かせ
てきました。魁が昔やんちゃしてたのは事
実だし、うちは片親で貧乏だった。だから
警察が言うように、魁の中に積もったスト
レスとか不満が爆発して、自分とは正反対

の暮らしをしてる家族を狙ってあんなこと
したんだって。俺の兄貴・竹内魁は犯罪者
なんだって。(鼻声で)でも、広尾台のニ
ユースを見て、確信しました。場所は離れ
てるし、時間も経ってるけど、絶対に同じ
ヤツがやったんです。魁は人を殺してな
い！ やっぱり俺の兄貴は、殺人犯なんか
じゃなかった！ 母さんはずっと信じてた
……だから俺も……諦めきれないんです
……！

高橋、ドンとカウンターを拳で叩く。

○(白水の回想)同・トイレ前(夜)

凜子、口元を手で覆って涙を流す。

その隣で佐々木がやりきれない顔で話
を聞いている。

○(白水の回想)同・店内(夜)

高橋、床に土下座する。

高橋「どうか先生の力を貸してください。一

生かかってでも、俺は魁の無実を証明したいんです！」

白水「先生はやめろ。そんな風に呼んでもらう資格は俺にはない」

と、バックヤードに引き下がる。

高橋、床に頭をつけたまま悔しそうに唇を噛み締める。

しかしすぐに白水が大量の資料を抱えて戻ってくる。

白水「俺も広尾台の事件を見て改めて確信した。魁は絶対に犯人じゃない」

高橋、目を丸くして顔を上げる。

高橋「え……」

白水「殺人ていうのは食欲や性欲と同じで、その衝動をずっと抑え込むことはできない。だから、広尾台の事件を見た時、被害者には申し訳ないが、俺は不謹慎にも嬉しかったよ。殺人鬼がようやくまた動き出した。これだ。これで犯人の尻尾を掴むチャンスができたからな」

高橋「まさか、ずっと犯人を探してくれてたんですか？」

白水「大した収穫はなかった。これが俺の持つてる全ての資料。本当は持ってちやいけ
ないもんのコピーもあるから、くれぐれも
取り扱いには気をつけてくれよ」

白水、資料の山をカウンターに置く。

高橋、上から一枚ずつめくっていく。

高橋「ありがとうございます……」

高橋、唇を噛み締めながら涙を堪えて
いる。

白水「正直かなり険しい道になる。本当
に覚悟はできてるか？」

高橋、キリツとした目で白水を見る。

高橋「はい！」

白水、頷く。

白水「一応助っ人もいる」

高橋「助っ人？」

白水「（トイレに向かって）ほら、いつまで
盗み聞きしてんだ」

佐々木と凜子が出てくる。

白水「ネットニュースの会社をやってる編集

長の佐々木と、護身術を教える凜子だ」

凜子「よろしくね。私が鍛えてあげるから」

佐々木「20歳でバーボンロックとは、酒飲

みの素質があるな。いい、気に入った」

佐々木、高橋の肩に手を回して頭をわ

しゃわしやする。

高橋、迷惑そうだが嬉しそうな顔。

（了）